



棕本673 存仁寺

ほ う き さん
2014年 7月

本当の

相(すがた)

になる

これが

仏教の目的

である

「暁鳥敏」

一法統継承に際しての消息一

本日、私は先代門主の意に従い、法統を継承し、本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主に就任いたしました。ここに先代門主の長きにわたるご教導に深く感謝しますとともに、法統を継承した責任の重きを思い、能う限りの努力をいたす決意であります。釈尊の説き明かされた阿弥陀如来のご本願の救いは、七高僧の教えを受けた宗祖親鸞聖人によつて、淨土真宗というご法義として明らかにされ、その後、歴代の宗主方を中心として、多くの方々に支えられ、現代まで伝えられてきました。その流れを受け継いで今ここに法統を継承し、未来に向けてご法義が伝えられていますよう、力を尽くしたいと思います。

宗門の過去をふりかえりますと、あるいは時代の常識に疑問を抱かなかつたことによる対応、あるいは宗門を存続させるための苦渋の選択としての対応など、ご法義に順つていらないと思える対応もなされてきました。このような過去に学び、時代の常識を無批判に受け入れることがないよう、また苦渋の選択が必要になる社会が再び到来しないよう、注意深く見極めていく必要があります。宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁のある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご縁のない方々に対しても、いかにあなたがかけていくのかを考えることも重要です。

本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化に付けて変わつていかねばならないでしょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。また、現代のさまざまな問題にどのように取り組むのか、とりわけ、東日本大震災をはじめとする多くの被災地の復興をどのように支援していくのかなど、問題は山積しています。「自信教人信」のお言葉をいただき、現代の苦悩をともに背負い、御同朋の社会をめざして皆様と歩んでまいりたいと思います。

平成二十六年（二〇一四年）六月六日

龍谷門主 釋専如ご門主 御消息

親鸞聖人が説かれた浄土真宗の教えは主著『顯淨土真実教行証文類』に「もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなり」と示されているように、阿弥陀さまのはたらきによつてこの私たちが救われるという教えであります。なぜなら、私たちの真実の姿、ありのままの姿とは、自己中心的な姿だからであります。そのことに真正面から向き合い、この限られた命を生きいくのが浄土真宗の教えを依りどころとする者の生き方であります。それは、いつの時代であつても、また、どの場所であつても変わることはありません。（つづく）

専如ご門主お言葉より

7月の行事

- 1日(火) 6時30分 おあさじ 
- 2日(水) 19時30分 コーラス
- 13日(日) 10時00分 日曜学校
- 16日(水) 6時30分 おあさじ
- 17日(木) 無量寿会一日研修 ユラックス

芸濃町内仏教会夏季大法要

町内各家の物故者の方々、ご先祖の方々を偲びつつ法縁に遇わせて頂きます。今年は椋本地区ですから皆さん、是非ご参拝下さい。

7月26日(土) 法話 河内淨得寺 松井茂樹師

7月27日(日) 法話 楠原淨蓮寺 真弓佳章師

両日とも13時よりおつとめ

会場 椋本 淨源寺様にて(真宗高田派) 

教区・鈴鹿組関連

7月7日(月)~8日(火) 組仏教壮年会本山念佛奉仕団

7月10日(木) 鈴鹿組連研協議会 門徒推進員連絡協議会

7月31日(木)

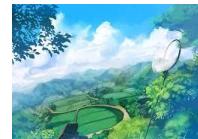
「御同朋の社会をめざす運動」東海教区研修会



「お寺の未来」～これからのお寺の100年を開く～

東京教区光明寺 松本紹圭さん

8月の行事

- 1日(金) 6時30分 おあさじ 
- 4日(月) おみがき本堂清掃
- 6日(水) 19時30分 コーラス
- 8日(金) 鈴鹿・四日市・桑名・名古屋 盆参り
- 13日(水) 午前 西町 新道 盆参り
午後 富家 新屋敷 岩原 豊久野
- 14日(木) 午前 中町 新町 新町南 盆参り
午後 花の木 団地
- (初盆報謝の時間は8月号にて)
- 15日(金) 豊が丘・一身田・亀山盆参り
- 16日(土) 6時30分 おあさじ
盆汁 下組
14時 灯籠送り・歓喜会法要

2014 仏のこどもサマーキャンプ

2014年8月21日(木)~22日(金)《1泊2日》

板取キャンプ場(岐阜県)



小学3年生~中学3年生まで

「本当の相(すがた)になる これが仏教の目的である」

今日は一八七七(明治一〇)年に石川県の真宗大谷派明達寺に生まれ、清沢満之氏に師事し、カリスマ性を持ち多くの信者を育てる一方、二葉亭四迷や西田幾多郎などの文化人と交流し、一九五四(昭和二十九)年に往生された暁鳥敏氏の言葉です。氏は、晩年「大病人だからこそ薬薬が必要だ」と当時の世間、また自らのことを示し叫んだと伝えられています。私たちは、自分のことは自分が一番よくわかつてていると思っています。まして、自分の顔を知らないといふ人はいません。しかし、自分の顔を直接見たことがある人はいるのです。私たちは、ありのままを写す鏡の前に立て、初めて今の自分の顔を知ることができます。言い換ればありのままを写すものがなければ、私たちは誰も自分の顔を知らないまま、その人生を生きることになります。親鸞聖人は自らを「罪惡深重の凡夫」とか「煩惱具足の凡夫」といわれました。苦惱する「大病人」の私たちは、その苦惱の原因が自らの自己中心的な煩惱であることを知るには、自らの勝手な姿を知らしめる「仏教の教え」(智慧と慈悲)の前に立つしかないのです。自らの身勝手な姿を「本当の自分の相」であると知らされた時、身勝手な私をそのまま許して下さる阿弥陀如来の大慈悲に包まれてることに気づかされるのです。同時に、その大慈悲の中でこそ「本当の私の相」を受け止めて生きる世界が開かれるのです。